

今週は受難週。私達の罪の為に苦しまれた主を見つめ、主の恵みに感謝したい。

I 「ゲッセマネという所に来て」：36。

ゲッセマネ＝油絞りの意。オリーブ山のふもとにある園。オリーブの木が茂り、格好の祈りの場だった。受難週の木曜日の事。「イエスは悲しみもだえ始められた。そのとき、イエスは彼らに言われた。

『わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、わたしといっしょに目をさまさない』：38。 ※主から学べる大切な事＝信頼できる人に、本当の辛さを打ち明けて、祈ってもらう事の大切さ。

①翌日の十字架の死（私達の罪の為の）を前に、悲しみもだえ苦しまれる主（ルカ22：44）。

②この箇所から、私達の罪の為に十字架の死がいかに深く重いものであったかが教えられる。

③「悲しみのあまり死ぬほどです」とペテロとヤコブとヨハネに正直に語られる。

「ここを離れないで、わたしといっしょに目をさまさない」：38。

「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい」：41。

誘惑は皆ある。それゆえに、陥らない（入って行かない、入り込まない）ように祈りたい。

地上では霊的な戦い（神から引き離そうとする）が常にある。

「自分を捨て、自分の十字架（自分を愛しておられる主の為に犠牲を払う覚悟）を負い」（16：24）、神の御心に従う事を邪魔する悪魔と自分自身の中に残っている罪がある。主よ助けて下さい！

II 一度目の祈り。

1. 「それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた」：39。

共に祈り合うと同時に、ひとりになり、神の前に出てひれ伏して祈る事の両方が大切！

神と自分の間に誰も入らない、神との真剣な交わり、祈り。

「大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ…キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり」（ヘブル5：7-9）。

2. 「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようではなく、あなたのみこころのようになさってください」：39。

①「わが父よ」：39＝御父の臨在を身近に意識。（十字架上では、私たち罪人の身代わりとして「わが神、わが神」）。

②「この杯」＝すべての人（私達も）の罪への神の正しい聖なる怒り、聖なる憤り、神の罪への怒りという聖なる審判、聖なる裁き。主が悲しみもだえ始められ、悲しみのあまり死ぬほどですと言われるほど苦しまれたのは、単に死を恐れられたからではない。その死が、神の聖なる怒りのもとにさばかれる罪人としての死であったから、永遠の関係の中で、この時の父なる神との交わりの断絶。

私達には想像できない恐れと苦しみ。私達の罪の為に。私達の罪はそれほど重い。

自分の罪の自覚と主の十字架の恵みの自覚は、つながっている。

「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、神の義（すべての罪が赦され、神と正しい関係に入れられる）となるためです」（Ⅱコリ5：21）。

父と子として永遠の初めからお持ちの親しい交わりが断たれ、人類を代表して、すべての人の罪を負い、さばかれる事が、どれほど重く、つらく恐ろしいものであったか、想像し難い。

クリスチャンとは、この苦しみをすべて理解できない事を認め、理解を深め続けるのが健全な歩み！

その為にも毎年受難週は貴重な週。

愛された御子としてではなく、私達の身代わりに、罪人、のろわれたもの（ガラ3：13）としての死を味わおうとしておられた。私達の代わりに、主はご自身で、この杯（私達の罪の為の神の聖なる怒りの杯）を飲まれたので、私達には、聖餐式の時、赦しの「杯から飲みなさい」（マタイ26：27）と語って下さる。

- ③「できますなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」：39→主は正直に祈られた。祈りは、私達を愛して下さっている御父に、正直に自分の願い、思い、心を注ぎ出せる交わり。且つ、祈りは、最善をなさる方のみこころに近づいて行く交わり。御父は、愛する御子から、この杯（私達の罪への神の正しい裁き、神との断絶、想像絶する苦しみ）を去らせず、私達の身代わりに御子をさばかれた。御父もいかばかりのお辛さか！その主の十字架の恵みの故に、主を信じる者のさばき、滅びが過ぎ去る「過ぎ越す」恵みが与えられる！
- ④「しかし、わたしの願うようにはではなく、あなたのみこころのように、なさってください」＝ご自身の願いを正直に祈られると同時に、ご自身の願いよりも、御父のみこころを第一とし、「みこころのように、なさってください」と祈られる主。私達の模範。主の祈りと重なる「みこころが天で行われるように地でも行われますように」6：10。「一時間」：40。深い祈り、御父との深い交わり。祈りの格闘。

Ⅲ 二度目の祈り。「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください」：42。

一度目に祈られた「できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」との言葉はなく、御父への服従が表されている。神との深い交わり、祈りの中で、みこころに近づいて行く。

そして、三度目の祈りをされた。：44。※パウロの格闘の祈りが思い出される。

「これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は」（Ⅱコリ12：8，9）。

Ⅳ 三度目の祈りを終え勝利を得られた主、自分から私達の救いの為に苦しみの十字架に進み行かれる主。

「まだ眠っているのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されるのです。立ちなさい。さあ、行くのです。見なさい。わたしを裏切る者が近づきました」：45，46。

私達の罪の為の死、神の聖なる怒りを受けられる死、御父との交わりが断たれる死を前に、悲しみもだえられた主が、三度の祈り、深い御父との交わり、格闘を通られて、

「立ちなさい。さあ、行くのです」：46と御父のみこころ（十字架で死ぬ）に従う事に心が定められた主、勇気をもって十字架に向かって進まれる主！

祈りの前と違う、変えられた主！

この素晴らしい主について行く私達の歩みにも、みこころを求め、みこころに近づき、みこころに従う為の御父の深いお取り扱いがある。私達の為に、自分から十字架で死なれた主に感謝します！

「自分から十字架の上で、私達の罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義（主ご自身、神のみこころ）のために生きるためです」Ⅰペテロ2：24